

# 他者からの受容感と認知的方略が大学生の学習動機に及ぼす影響

○井原和花

(広島国際大学大学院心理科学研究科)

## 問題

学習動機を高めることは教育の大きな目標である。学習動機に関わる要因としては、被受容感の影響(名取・三輪, 2008)や、認知的方略の影響(光浪, 2010)が指摘されている。しかし、これらは独立した研究であり各要因の交互作用が学習動機に影響を与えている可能性については指摘されていない。そこで本研究では、被受容感と認知的方略が学習動機に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

## 方法

**調査参加者** 広島国際大学の学生 136 名のデータを分析に用いた。**質問紙構成** ①学年・年齢・性別②岡田・中谷(2006)が作成した大学生用学習動機づけ尺度(34項目・5件法)③外山(2013)が作成した楽観・悲観性尺度(20項目・4件法)④杉山・坂本(2006)が作成した被受容感・被拒絶感尺度のうち、「被受容感」(8項目・5件法)を使用した。

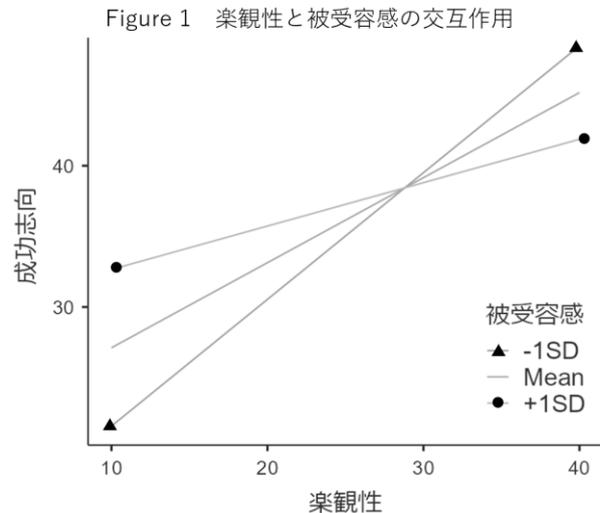
## 結果

大学生用学習動機づけ尺度に探索的因子分析を行った結果、第Ⅰ因子内発(10項目、 $\alpha = .93$ )、第Ⅱ因子成功志向(10項目、 $\alpha = .88$ )、第Ⅲ因子、外発(4項目、 $\alpha = .87$ )、第Ⅳ因子取り入れ(6項目、 $\alpha = .77$ )に分類された。

従属変数を学習動機づけ尺度の4つの下位因子、独立変数を「楽観性」「悲観性」「被受容感」「楽観性と被受容感の交互作用」「悲観性と被受容感の交互作用」として重回帰分析を行った結果をTable 1に示す。また、楽観性と被受容感の交互作用についてFigure 1に示す。

Table 1 重回帰分析の結果

	内発	成功志向	取り入れ	外発
楽観性	.34*	.56***	-.05	-.03
悲観性	-.04	.29*	.30*	.45
被受容感	.08	.13**	.31	-.02
調整済R <sup>2</sup>	.18***	.24***	.12***	.22***
楽観性*被受容感	-.17	-.27**	-.00	-.02
悲観性*被受容感	-.02	-.12	-.14	-.02
$\Delta R^2$	.03	.06**	.03	.00

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$ 

## 考察

各要因の独立した影響として、楽観性については内発や成功志向への正の影響が示されたが、楽観主義者は挑戦すべき事態に対して自信を維持して粘り強い姿勢を見せる傾向がある(Carver & Scheier, 2005)ことから、達成への欲求や学習自体を目的とする挑戦として学習動機が高められると考えられる。悲観性については成功志向や取り入れへの正の影響が示されたが、悲観主義者の原因帰属は、ネガティブな結果期待とコントロール不能性への期待である無力感期待を形成する(鹿毛, 2013)ことから、悪い結果の回避や失敗の回避によって学習動機が高められると考えられる。被受容感については成功志向への正の影響が示されたが、被受容感は自己充實的な面にのみ影響をおよぼす(名取・三輪, 2008)ことから、被受容感によって良い結果を目指そうとするなどの自己充實的な学習動機が高められると考えられる。

被受容感と認知的方略の交互作用については、被受容感と楽観性の成功志向への交互作用が示された。被受容感が高く楽観性が高い場合には成功志向への影響が高まっていた。また、被受容感が低く楽観性が高い場合には成功志向への影響がより高いことが示された。これにより、楽観性が高い場合には成功志向への被受容感の影響力が小さくなることが示された。